

令和7年度 hug くむ保育園大岩評価書

I 経営の重点に関わる事 評価段階（A：大変良い B：まあまあ良い C：あまり良くない D：全然良くない）

1. 園教育（卒園目標）：社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標：「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標：「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
重点目標	評価指標	評価	自己評価
社会に出ていく為の基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	子どもたちの言葉にならない想いを考え、受け止めるようにしている。また、積極的な会話や適度なスキンシップを図ることにより、子どもたちが安心できる環境づくりに努めている。	A
	人や物に関心を示し（気づき）探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	興味に合わせて玩具や環境を変えたり、一日を通した保育の流れを考えるようにしたりと意識することに努めた。一方、環境構成を考えることが苦手な職員もあり、まずは子どもたちの興味関心は何かを考え、環境構成に活かせるように学ぶ必要がある。	B
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	子どもたちの感情を受け止め改めて言葉にしたり、スキンシップをとったりと信頼関係を築けるようにした。また、探索しようとしている時は見守ることに努めた。	A
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。（行動しやすいよう促している）	子どもたちが「～したい」と思えるよう、活動前の導入時にアイテムを使ったり、興味がもてるような伝え方を意識したりした。一方で、やり方を伝えすぎたり、発達に合わない伝え方をしたりと保育者によってはスキルに差が生じた。	B
	行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。	できたことや頑張ろうと挑戦したこと等を、子どもに合わせた伝え方で具体的に伝えることができた。また、うまくいかないことに対しても子どもに合わせた援助を行うことで成功体験を積めるように関わることができた。	A
	お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。	すぐに声はかけず必要に応じて仲立ちをしたり、活動への切替がスムーズになるような声掛けを工夫したりすることができた。	A

2. 保育方針		
評価指標	評価	自己評価
根拠に基づく保育を実践します。	発達に見通しをもちステップを意識して関わることができた。一方、活動内容によっては子どもに合っていないこともあったので、発達を理解し関わるようにしたい。	B
子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	衣服の着脱や排泄、食具の使い方等、1人ひとりに合わせた対応をしている。一方、発達や状況に応じた臨機応変な関わりが不足していたり、保育内容について実践した後改善すべきと感じることもあったりした。	B
子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	常に子どもの目線・気持ちに立ち、保育者1人ひとりが意識することができた。	A
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	子どもたち1人ひとりに合わせた対応をするように意識した。また、対応が同じにならないように発達を考慮しながら伝えるようにした。	A
「いいところ見つけ」を心がけます。	子どもに伝えるのはもちろん、保育者間でも子どもの良いところを伝え合うことで、保育者1人ひとりが子どもの良いところに目を向けることができた。	A
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	子どもの反応を見ながら、“おもしろそう”“やってみたい”と子どもたちが思えるように試行錯誤している。また、すべてを伝えるのではなく、自分で考えることで意欲につながるような関わりをすることができた。	A

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	月齢だけで判断せず子どもの姿を捉えるようにした。また、発達に合わせて指先を使った遊びや簡単なルールがある遊びを取り入れている。一方、発達への理解が不十分な職員もあり、その差を縮めていくことが課題である。	B
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	担任間、家庭と連携しながら保育を実践することができた。また、午睡や給食等、その日の様子を保護者に伝え、子どもが無理のないペースで進めることができています。	A
	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	保育者も環境のひとつであるという意識で関わることができた。また、子どもの行動からヒントを得て環境を整えることができた。	A

安全管理 ・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作 り、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	昨年度からの課題である人的要因に目を向けた防止策を検 討するようにしたが、保育者1人ひとりの意識に変化が見 られ、自分事としてアクシデントを考えることができるよ うになった。日頃の保育中のコミュニケーションを大切 に、保育者自身の働きかけに目を向けることを常に意識し たい。	B
保健管理 ・指導	生命の保持	・安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理 を行っている ・「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な 形で食に関わる体験ができるよう工夫している。	家庭での様子も把握するように努めたが、保育者によっ ては個々の家庭環境により難しいと感じることもあった。ま た、食に関わる体験が昨年比に不足している感じるた め、来年度は積極的に取り入れていきたい。	B
	健康教育の充実	・園児の健康状態の把握に努めている ・園児の発育・発達状況の把握に努めている。 ・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指 導をしている。	子どもの小さな変化にも気づき、職員間で共有すること ができた。一方、自立に向け、子どもたちへ生活習慣を身 に付けることの大切さを伝えることが不十分であった。	B
特別支援 教育	支援体制の構築	・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの 関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害 や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の 研鑽に努めている。	保育者により対応が変わることがあり、子どもが戸惑った り、信頼関係を築けなかったりすることがあった。しかし ながら、学ぼうとしたり、保育者間で情報共有しようと したりと、昨年度より意識することができた。	B
組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員 間で連携を取り合い、保育を進めている。	保育者1人ひとりが自分に何ができるかを考えながら保 育する姿があった。一方で、保育者個々の意見が独り歩き することもあったので、連携をより意識できると良い。	B
研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができて いる。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究 を行っている。	外部研修が自由選択であったが、認知度が低いこともあり 積極的な参加はなかった。個々のスキル向上のためにも職 員が学びたい分野について深められるよう、フォロー体制 も整えたい。	B
教育・保 育環境の 整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自 身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	職員や子どもたちが“楽しい”と思えるような保育ができ るように保育者間で連携をとるようにしている。また、そ れぞれの得意なことを保育に取り入れることもできた。	A

家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	家庭環境への支援機能の充実をさせるためには、普段の保護者とのコミュニケーションが大切だと考えている。そのためには、保護者からご相談事に対して、適宜園長・主任へ相談し、スピード感をもって解決していくという意識を皆でもち対応していきたい。	B
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	安東こども園へ訪問し、園庭で遊ばせていただいたり、進級に向けて室内を見学させていただいたりと定期的に訪問する機会を設けた。次年度は、当園の働きかけで安東こども園の園児さんと交流する機会を設けたい。	B
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	園開放実施も定着しており、hug くむ保育園に興味をもつていただける良い機会となっている。	A

Ⅲ 園としての保育の総括

近年課題である、保育者の知識・技術の不足による保育の質向上が目標であった１年だった。立場の違いからお互いに意見を伝え合うことが難しい保育者もいたが、昨年度に比べ意識していたのか、意見交換はできるようになったきたと感じる。同じ想いで保育ができるように、今後もお互いにフォローし合い、連携を密にできるとより良い。 次年度においては、組織力をさらに高め、個々においてもスキルアップをさらに進めていきたい。

Ⅳ 園としての経営の総括

今年度は、職員の不足により０歳児に空きがあり、お待ちいただいていたご家庭には申し訳ない気持ちであった。引き続き離職率０を目指し、職員が働き続けたいと思える職場環境をつくり、お互いにフォローし合い、想いを伝え合い、職員１人ひとりがスキルアップしていくことが次年度も課題である。そのためには、個々に自学を惜しまず、フォロー体制としては、職員１人ひとりの能力に合った伝え方や実践方法を模索することで、子どもたちに還元していきたい。 年々、保育業界を取り巻く環境は厳しくなっているが、hug くむ保育園では遊びや生活を充実させ、子どもたちが１日を通して満足感をもって過ごせる環境を整え即実行することを目標としたい。
